



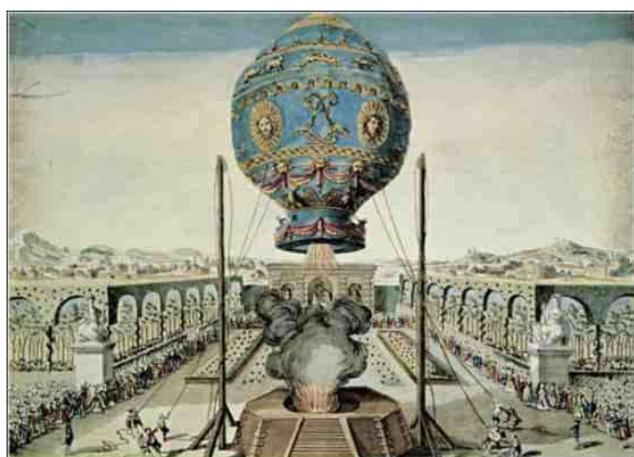
館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 8 月 2 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

「熱気球」時代を越えて再び



パリオリンピックがはじまりました。パリでのオリンピック開催は100年ぶり3度目。第33回となる今年の開会式は私にとって特に印象的でした。まず会場が競技場でないなどという発想は今までなかったでしょう。選手は時に噴水浴びながらボートに乗って登場。セーヌ川ってそんなに水質良かったっけ？おなか壊さないで下さいね。そしてラスト、セリーヌ・ディオーンが「愛の賛歌」を熱唱する中、聖火はトロカデロ広場へ。ところで、セリーヌ・ディオーンと言えば2022年に難病とされているスティッフパーソン症候群を患っていることを公表し、同疾患は筋肉の硬直や痙攣を引き起こすことから歌うことが難しく、歌手活動を休止していたはずですが、そんな素振りには微塵もみせずお見事。さすがプロです。そして広場で聖火を待っていたのは巨大な気球型の聖火台。あれあれ、この光景、子どもの頃に読んだ本の写真と似ている。それもそのはず、今回の開会式の演出家は、パリで熱気球実験が行われた事を知っていてヒントにしていた訳です。

熱気球を発明したのはモンゴルフィエ兄弟です。世界初の有人飛行も行なっています。兄弟たちは、フランスのリヨンの南方の町アノネーで製紙業者の息子に生まれました。兄弟の初の公開飛行は1783年6月に行われ、布で作った大きな袋の下で火を燃やし、袋を上昇させることに成功しました。1600～2000mまで上昇し、2kmの距離を約10分間滞空しました。その成功はすぐにパリに伝えられ、2回目の飛行は9月11日、レヴェイヨンの屋敷に近い広場で行われました。3回目は9月19日、ヴェルサイユ宮殿でルイ16世と王妃マリー・アントワネットの眼前で行われ、気球は約8分間滞空し、3kmほど移動しました。そして1783年10月15日、レヴェイヨンの工

場で史上初の気球の有人飛行が行われました。さらに1783年11月21日、熱気球に2人が搭乗し、パリの西にあるブローニュの森に近いお城の庭から発進し、910mほどまで上昇、パリ上空の9kmの距離を25分間にわたって飛行しました。この飛行はセンセーションを巻き起こし、多数の版画が作られています（私が見たのもその中の一つなのだと思います）。

ところで、今回の聖火台、いくらロープかなにかで縛ってあるにせよ、火がついたまま飛んでいったらパリ中大変なことになるのでは、パリに消防法は無いのかと、一人心配していましたが、なんとこれ、実際に火が付いているわけではなく、水と光で表現したもので、燃料を使わない世界初の試みなのどうか。え？それって聖火と言えるのか？本物の火はどこ行った？



ちなみに、これまでのオリンピック地域別の開催回数は、欧州の30回（夏季16回・冬季14回）、国別ではアメリカの8回（夏季4回・冬季4回）がそれぞれ最多で、日本の開催回数4回（夏季2回・冬季2回）はアメリカ・フランス（5回）に次いで多い回数です。

また、過去に2回以上の夏季オリンピックを開催した都市は、アテネ（1896年・2004年）、パリ（1900年・1924年）、ロンドン（1908年・1948年・2012年）、ロサンゼルス（1932年・1984年）、東京（1964年・2020年）の5都市のみとなります。

